



本書では、素顔を見せないマスク依存症に始まり、薬物依存、ネットいじめ、教員を含むスクールカースト、

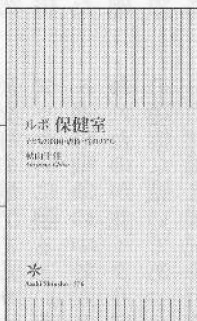
性非行、性同一性障害への差別意識、親からの虐待と愛着障害などの問題を、保健室の現場から書き上げる。そして養護教諭

は「困った子は、本人自身が困っ

ている」とらえるが、他の教諭はその問題に気づきにくいという。このようなことから、貧困の連鎖を断ち

切るための学校の役割について、もはやメディアからも見限られている現状を指摘し、保健室を「子どもを救う最前線」にしようとする。

秋山氏は「どうして子どもたちは、保健室の中だとこんなに自然体になるのか」と提起し、成績で評価されないから、否定されないからという理由以前に、養護教諭に、取り繕うようなと



ルポ 保健室
子どもの貧困・虐待・性のリアル

秋山千佳 著
842円 朝日新書
03-5541-8757

ころがないことを指摘する。心がないことは言わない、わからないことはわからないと認める。子どもだからと下に見ることなく、一人の人間として尊重する。相談に対しては「どうしたの」と耳を傾け、熱っぽいと言われれば「どれどれ」と額に手で触れ、五感と神経をフル稼働して向き合う。

筆者は考える。一般の教諭にとっても、保健室でのこのような「自然な対応」は見習うべきところが多々ある。ただ、教室が保健室のようになればよいという話ではあるまい。

もちろん、本書に登場する「保健室に入る」とする生徒を追い返すベテラン教師などは何とかなりたい。しかし、より本質的には、「居場所を求める声なきSOS」に対して、保健室のほか、図書室などの「居場所」と、そこでの専門職の意義と連携の必要性を認識すべきということなのだろう。

(聖徳大学教授・西村美東士)